

〔柳亭筆記四〕伏笠

紫の一本天和二年浄書に曰此待乳山の風景言語に及がたし、○中山の麓を歩行にて行を山の茶屋か

ら知る人の見ることもやと熊谷笠をふせてかぶり云々醒翁此文を引て前さがりにかつぎて

面の見えざるやうにするをすべて伏編笠といへりといふ説尤よし俳諧には伏笠と見えたり

あみ笠にもあれ菅笠にもあれすべ  
てかくするを伏笠といふなるべし

ねごと草印本西にかたぶく月さへもたれに人目を忍びてや伏笠をめす大ぞらを思ひの餘

りにうち詠て

別れ路の泪の末をいとふてやえら菅笠をめす臙月

伊勢踊寛文八年印  
本加友撰ふせ笠や逢うてうるさき人時雨の玄達此句よく醒翁の説に合す

〔人倫訓蒙圖彙七〕住吉踊 住吉のほより出る下品の者也菅笠にあかき絹のへりをたれて

顔をかくし白き著物に赤まへだれ團をもち中に笠鉢をたておどる

〔甲子夜話 四十一〕都下諸大名ノ往還スルニソノ行装尋常ト殊ナルナリ眼ニ留マル所ヲコ、ニ

舉グ○中  
略

久留米侯ノ鎗持ハ雨天ニハ笠ヲ戴ズシテ鉢巻ヲス手廻リノ者ハスベテ笠ナシト云是ハ官用  
式ヲ准用  
ニスル  
ニヤル

仙臺侯ノ駕籠ノ者モ雨天ニハ笠ナク鉢巻ナリ是ハ古ノ遺法カ

土佐ノ高知侯ノ鎗持モ雨天ニ笠ヲ用ヒズ桐油ノシヨロ頭巾ヲ著ス○中  
略

彦根侯伊井ハ  
氏略雨天ノトキハ手廻リノ者笠ハナク濡タルマ、ナリト云

〔古今和歌集一〕むめのはなをおりてよめる 東三條の左のおほいまうちきみ

鶯のかさにぬふてふ梅花おりてかざ、ん老かくるやと